# 「協働性」着目した第二言語教室活動としての としてのピア・レスポンスの可能性
## －活動プロセスの分析を中心に－

原田　三千代

学位取得年月：平成 20 年 3 月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】協働性、　活動プロセス、　社会的相互作用、　自己推敲

【要旨】

従来、日本語作文教育では、教師主導型の添削や産出物が重視されてきたが、近年、学習者の多様化に伴い、書く過程や内容を重視する考え方へと学習観や教育観が変化してきた。その一つの表れとして、ピア・レスポンスが注目を集めている。ピア・レスポンスの理論的基盤には、ヴィゴツキーの認知発達に関する理論があると言われている。ヴィゴツキー(2001)は、人間の認知的発達は、言葉を媒介にした人間同士の社会的相互作用によって得られたものが社会的なものから心理的なものへ移行する過程にあるとしている。この過程をピア・レスポンスに当てはめてみると、書き手が読み手との相互作用によって生まれたものを、自分自身の推敲として取り入れる際に、新たな構築が生じると考えられる。

本論文では、第二言語(L2)日本語作文クラスにおいて、就学生、学部留学生を対象にピア・レスポンスの活動プロセスを中心に分析することによって、「協働性」に着目した L2 教室活動としてのピア・レスポンスの可能性を考察することを目的とし、研究Ⅰ～Ⅳを提示した。

研究Ⅰでは、個々の推敲作文の変化とピア・レスポンスの関係を考察した。その結果、ピア・レスポンスの前後では推敲作文に肯定的変化が見られ、内容、構成に関する変化の範囲は段落に及ぶものもあった。しかし、個々の作文の変化の傾向は異なっており、活動プロセス自体の質の問題と自己推敲の問題が存在する。研究Ⅱでは、学習者間の関係とピア・レスポンスの関係を探った。その結果、初期のピア・レスポンスでは、読み手、書き手という役割意識があり、アドバイスの伝達・受容の関係が存在するが、活動経験の積み重ねによって役割の遂行の仕方に変化が見られた。読み手の日本語能力が書き手より低い場合であっても、質問－応答パターンから意見、反論、理由づけなどへと発話が変化し、両者の間には、協働的な関係が生じる可能性が示唆されている。研究Ⅲでは、研究Ⅱにおける活動経験が作文プロダクトに及ぼす影響を探った。自己推敲作文の平均評価得点において、ピア・レスポンス群と教師添削群を比較した結果、ピア・レスポンスは内容的側面に有効に働き、教師添削は内化されにくいことが示唆された。研究Ⅳでは、言語能力のみならず、活動に対する習熟度の異なる学習者が存在する L2 クラスに目を向ける。8 ヶ月間のピア・レスポンス期間をⅠ～Ⅳ期（各期は 2 カ月）に分け、3 人の学習者(I,S,B)の活動を観察した。S を中心に考えると、Ⅰ期のピア・レスポンスでは経験者Ⅰから未経験者 S へ、単語や表現など多くの言語的支援が提供された。Ⅱ期では、S は活動の手順に慣れ、書き手、読み手としての役割を果たそうとしている。文章の構成や内容に関する議論や、新しい推敲の視点が生じている。Ⅲ期では、新たな参加者 B を迎え、相互補完的な活動が展開されている。Ⅳ期のピア・レスポンスでは、S が B に寄り添いながら共に思考することによって、両者の協働的産出が可能になっている。したがって、本研究において、ピア・レスポンスという活動は L2 教室に受け入れられ、教室活動の一つとして実現の可能性があることが示唆された。

今後は、学習者側の視点から、この活動の背後にある学習者の意識とその変容の過程を捉えることを課題としたいと考える。

（はらた　みちよ）